

「黙っていないで」 列王記下7：1～11

I 導入部

おはようございます。8月の第五日曜日を迎えました。暑い日が続いております。残暑も厳しいです。8月最後の日曜礼拝です。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝致します。

2020年、本来ならばオリンピックが、日本で行われている予定でした。各選手は、金メダルを目指して頑張ったことでしょう。来年に延ばされましたが、果たしてオリンピックが実現できるのかどうか分からない状況です。

「沈黙は金、雄弁は銀」ということわざがあります。この言葉は、日本のことわざのように思われますが、違います。イギリスの思想家、トーマス・カーライルが語った言葉でした

(Speech is silver. silence is golden.)。「何も語らずに黙していることは、すぐれた雄弁よりも大切である」とか「沈黙を守る方が、すぐれた弁舌よりもまさる」とか「雄弁は大事だが、沈黙すべき時を心得ていることはもっと大事である」というような意味があるようです。

日本語で、銅メダルの銅は、金と同じと書きますが、銀メダルの銀という漢字は、金よりも良いと書きます。「沈黙は金、雄弁は銀」とは、黙っているほうがいいのだ、と考えられますが、「雄弁は大事だが、沈黙すべき時を心得ていることはもっと大事である」とあったように、沈黙すべきことを心得る、つまり、語るべき時には、語るということをも指しているようにも感じるのです。今日は、列王記下7章1節から11節を通して、「黙っていないで」という題でお話し致します。

II 本論部

一、絶望の中で語られる神の言葉

当時、イスラエルの中心であったサマリアは、アラム軍に包囲され、大飢饉の状況でした。

列王記下6章においては、大飢饉のゆえに母親が自分の子どもを食べるといったような悲惨な状況がありました。イスラエルの王の使者は、「この不幸は主によって引き起こされた。もはや主に何を期待できるのか。」(列王記下6:33) 言っていますが、この言葉はイスラエルの王の言葉そのものだと思います。2011年3月11日午後2時46分東北大地震が起きました。アエラという雑誌に、ある写真家の写真と言葉が紹介されました。そこには、「全土消滅、昭和消滅、神様消滅、独立独歩」とありました。地震の悲惨な状況を見て、神などいないと表現せざるを得なかったのだと思います。神様がいるなら、どうしてこんな事が起こるのか、と誰もが疑問を持つように思います。新型コロナウイルスもそうでしょう。

そのような厳しい状況の中で、預言者エリシャは神の言葉を語るのです。7章の1節で

す。「エリシャは言った。「主の言葉を聞きなさい。主はこう言われる。『明日の今ごろ、サマリアの城門で上等の小麦粉一セアが一シェケル、大麦二セアが一シェケルで売られる。』」と。 現実には、ろばの頭一つが銀八十シェケル、鳩の糞四分の一カブが、5シェケルで売られていたのです。リビングバイブルには、「ろばの頭一つがと円、鳩の糞四分の一カブが900円」とあります。しかし、麦粉12リットルが300円、大麦24リットルが300円で売られるようになるとエリシャは、神様の言葉を語るのです。

悲惨な状況です。どこにも好転する兆しが見えない中で、絶望の中で、死を待つしかない状況の中で、エリシャは、神様の助けがある、祝福があると宣言したのです。

エリシャの言葉を聞いた王の介添えをしている侍従は、「主が天に窓を造られたとしても、そんなことはなかろう。」と言ったのです。リビングバイブルには、「たとえ主が天に窓をお作りになっても、そんなことが起こるはずはない」ときっぱりと否定しています。エリシャを通して語る神様の言葉が現実逃避に見え、絶対にあり得ない事だと言ったのです。

私たちも現在、新型コロナウイルス感染拡大の影響で精神的にも、肉体的にも、信仰的にも疲れています。感染者が増加し、先の見えない状況に、不安に満ち、恐れ、神様に信頼することが困難になっているように思います。状況がどうあれ、神様の言葉は、歴史を通して、時代が変わろうとも、聖書を通して「恐れるな、大丈夫」と語るのです。イエス様は、困難の中に私たちと共におられ、私たちを守り、支えて下さるのです。現実がどうあれ、聖書を通して語られる、神様の言葉を信頼して、信じて歩みたいと思うのです。

二、神の偉大なるわざ

この大飢饉の中で、サマリアの城壁の中に入ることもできない人々がいました。それは重い皮膚病を患っている4人でした。重い皮膚病は、前の訳では「らい病」今はこの言葉は使いません。「ツアラアト」と原語で表現する聖書の訳もあります。イスラエルでは、この病気は汚れた病気とされていました。ですから、この病気になると家族や友人から隔離されて、別の場所で生活し、「汚れた者です」と大声を出して、自分が穢れていることを公にし、ただ死を待つしかない、全く希望も将来もない人生を送っていたのです。

サマリアの城壁の中では、大飢饉で大変な事になっていました。この4人は今まで、城壁の中にいる人々から物を恵んでもらって生きながらえていたのです。城壁の中にいる人々の生活があつてこそ、自分たちは守られていたので、その人たちが大飢饉で何も食べることができない状況では、当然この4人も生きることはできないのです。

ですから、4人は考えました。4節には、「町に入ろうと言ってみたところで、町は飢饉に見舞われていて、わたしたちはそこで死ぬだけだし、ここに座っていても死ぬだけだ。そうならアラムの陣営に投降しよう。もし彼らが生かしてくれるなら、わたしたちは生き延びることができる。もしわたしたちを殺すなら、死ぬまでのことだ。」とあります。町に入っても食料は全くない。ここに座っていても死ぬだけだ。それならば、アラムの陣営に行って食料を恵んでもらおう。たとえ殺されても、どうせ死ぬしかないのだから、と腹をくくり、アラムの陣営に行ったのです。

すると、そこには誰もいなかったのです。何故かと言うと、6節、7節に、「主が戦車の音や軍馬の音や大軍の音をアラムの陣営に響き渡らせられたため、彼らは、「見よ、イスラ

エルの王が我々を攻めるためにヘト人の諸王やエジプトの諸王を買収したのだ」と言い合い、夕暮れに立って逃げ去った。彼らは天幕も馬もろばも捨て、陣営をそのままにして、命を惜しんで逃げ去った。」とあるとおりです。

戦いに勝利するためには、武器も兵士の人数も、馬の数も必要ありませんでした。神様は戦車の音、馬の音、大軍の音を聞かせられた、これだけでした。全能の神様、創造の神様、復活の主は、何でもできるお方なのです。私たちは、この神様を信じているのです。だから、大丈夫なのです。安心して、このお方に全てをお任せすればいいのです。

三、自分のできる方法で伝えたたらいい

アラムの陣営の天幕は、数多く、そこには食べ物や銀や金、衣服がおびただしくありました。バイキング料理、ビュッフェ料理のように、目の前には多くの料理が並べてあるように、4人は食べまくりました。空腹だったので、我を忘れて食べました。金や銀を、衣服を隠しました。食べて満腹して、落ち着いたたら、自分たちのしていることが、良いことかどうかと疑問に思ったのでした。9節です。「彼らは互いに言い合った。「わたしたちはこのようなことをしてはならない。この日は良い知らせの日だ。わたしたちが黙って朝日が昇るまで待っているなら、罰を受けるだろう。さあ行って、王家の人々に知らせよう。」

アラムの陣営にある食料や、金や銀、そして衣服は、この4人が苦勞して得たもの、彼らの努力の結果与えられたものではありませんでした。何の努力もなしに、与えられたものでした。サマリアの城壁の中では、未だに大飢饉のままで、飢えて死のうとしている人々が大勢いる。かつては、城壁の人々に、恵んでもらって命をしのいできた。サマリアの人々は、未だにアラムの軍勢に囲まれている。どうすることもできないと恐れ、震え、絶望している。しかし、アラムの軍隊の兵士などどこにもいない。もうすでに、逃げて、誰もいないし、食料がいっぱいある。今日は良い日なのに、自分たち4人だけが良い思いをしてもいいのだろうか。明日になるまで待ってはならない。今も食べる物がなくて、飢えて死のうとしている人々が大勢いる。一刻も早く王家の人々に知らせようと彼らは考えたのです。

アラムの軍隊がどこにもいないということは、自分たちしか知らないのですから、別に知らせなくても誰にもわからない。自分たちは、重い皮膚病にかかり、将来もない。このように、食料や、銀や金、衣服が目の前にたくさんある。4人のものにしてしまっても、自分たちの病気の苦しみや将来がない苦しみを食料や、銀や金、様々な衣服で満足させてもかまわないのではないかと考えても誰も文句は言わないかも知れない。しかし、自分たちは、良き知らせを知っている。自分たちのためだけに、この恵みを、祝福を使ってはならない。

彼らは、今にも飢えて死のうとしている人々、苦しんでいる多くの人々の事を思いながら、この良き知らせを一刻も早く伝えたいと王家の人々に急いで伝えたのでした。

パウロという人は、クリスチャンを迫害することが神様に喜ばれると信じて、クリスチャン撲滅のために頑張った人です。しかし、復活の主に出会って、クリスチャンの信じているイエス様が真の神様であることがわかり、イエス様の十字架と復活を信じて救われま

した。

そして、イエス様の福音を命懸けで伝えた人物です。彼はコリントの信徒への手紙第一 9章16節で、このように言っています。「もっとも、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせずにはいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。」と。

私たちは、この4人の重い皮膚病の人々が知っていた、体験した良き知らせを知っています。それは、パウロが経験した、イエス・キリスト様の十字架と復活を通して与えられる魂の救いと罪の赦し、死んでも生きる命、永遠の命、復活の望みです。私たちは罪の赦しを経験して、罪赦されたことによる平安を持っています。しかし、多くの人々は、罪を犯し、罪のゆえに苦しんでいるのです。罪の赦しを知らないで、苦しんでいるのです。そのまま放置すれば、死、滅びなのです。私たちは、救われて天国に行けます。しかし、イエス様の十字架と復活を知らない人々は、裁かれて永遠の死を経験するのです。私たちは、良き知らせを知っています。持っているのです。ですから、この良き知らせを伝えたいと思うのです。

自分がクリスチャンだと話す事が救いのきっかけにもなるでしょう。日曜日に教会に行っているということも大切です。聖書のわかりやすい内容の本を紹介したり、説教のCDを紹介したり、ライブ礼拝を紹介することも、良き知らせを伝えることになるでしょう。私たちは、自分の持っている福音を、良き知らせを自分のできる方法や仕方で、家族に、友人知人に、大切な人々に紹介したいと思うのです。

Ⅲ 結論部

この4人の良き知らせを伝えたことがきっかけになり、サマリアの町では、エリシャの言葉の通りに、食料が安く手に入り、人々は生き延びることができたのです。王の介添えをしている侍従は、「主が天に窓を造られたとしても、そんなことはなかるう」と言いましたが、神様は思わない所から、予想もしない所から救いを与えて下さいました。そして、もう一つのエリシャの言葉、「あなたは自分の目でそれを見る。だが、それを食べることは無い。」(7:2) という言葉の通りに、彼は門で民に踏み倒されて死んだのです。

神様の言葉を疑い、否定した侍従は裁かれました。この侍従のように、私たちは自分の思い通りに行かない時、祈っても答えられない時、健康を害し、経済的に困り、人間関係で悩んでしまう時、神様を疑ったり、不信仰になってしまうことがあります。しかし、私たちはあの侍従のように裁かれないのです。それは、すでにイエス・キリスト様が私たちの過去、現在、未来の全ての罪をご自分の上に置かれ、罪のないお方が罪ある私たちの身代わりに十字架にかかり、父なる神様から見捨てられ、裁かれて、尊い血を最後の一滴まで流し、命をささげて下さった。死んで下さったのです。死んで葬られ、よみがえられて死に勝利されたのです。ですから、私たちは、イエス様の十字架と復活のゆえに、さばかれることはない聖書は宣言します。私たちの罪は赦され、魂は救われ、永遠の命、天国の望みが与えられたのです。私たちは、この素晴らしい福音に預かっているのです。「沈黙は金、雄弁は銀」とは言いますが、語るべき時に、語るべきことを語りたいたいと思うのです。「この日は良い知らせの日だ。」と重い皮膚病を患った4人は言いました。「御言葉を宣

べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい。」(Ⅱテテ 4:2) と聖書は語ります。私たちは自分のできる方法で福音を知らせたいと思うのです。この週もイエス様に信頼して歩んでまいりましょう。